

住民主体型育児支援組織における リーダーの動機付けに関する考察

山下亜紀子

The Analysis of Leaders' Motivations in Parenting Support by People-centered Organizations

Akiko YAMASHITA

1. 本研究の目的

育児の社会化は現代社会が対応すべき課題であり、近年、家政学においても重要な研究テーマの1つとして「子育て支援」が位置づけられている(冬木 2010:10)。山縣文治の整理に準ずると、子育て支援の担い手は、行政主導型、住民主体型、そして企業型に大別できる(山縣 1998)⁽¹⁾が、1990年代以降のボランティア活動や市民活動の盛隆に伴い、住民主体型担い手の活動の裾野が広がっている。しかしながら、この類型を対象とする研究蓄積は未だ乏しい。母親自身による組織化や子育て支援団体のNPO法人化へ向けた取り組みが活発化している現状(大日向 2005:127)を鑑みると、これらの組織の評価を行うことや課題を明確にすることは、育児の社会化を進める上で喫緊の研究課題である。

筆者は、こうした問題意識にたち、住民主体型育児支援組織の成果や今後の展開可能性について検証を行ってきた。既に組織の歴史的発展過程や活動特性の分析から、自発的な連帯に基づく組織化を行っている点、住民のニーズをとらえる柔軟性や活動の独自性を有する点において、その有用性を述べている。その一方で、そうした活動を支える運営基盤が脆弱であり、人材面や資金面が活動を継続する上での隘路となっていることも指摘した(山下 2011)。

さて、組織が有している特性は、組織に属する人々の理念や意識による規定力も大きいことが想定される。また住民主体型組織においては、単独、あるいは少数のリーダーが主導して組織化を行い、リーダーの意向がその後の活動内容も決定している事例が多い。そこで本研究では、組織の生成過程においてリーダーが活動をはじめるといった動機付けや活動継続を規定している動機付けを分析する。これらの分析から、育児支援を担う住民主体型組織の固有性や有効性を検証し、あわせて課題について考察することとしたい。

2. 先行研究の整理と本研究の課題

育児支援研究において、ボランティア団体、市民活動、NPO、育児サークル等、住民主体型の範疇に含まれる組織や団体を分析対象とする研究蓄積は一定程度みられ、そうした組織の有用性が論じられている。しかし、それらが個別事例の検討や当事者自身の考察に止まっており、住民主体型組織を俯瞰的にとらえる段階にまで至っていない問題については拙稿で指摘した通りである（山下 2011）。

また、こうした組織に関わる人々の意識と組織特性との関連を分析した論考は多くはない⁽²⁾。例えば大豆生田啓友は、市民活動としての子育て支援の活動について、市場原理に基づいた子育て支援との比較を試みる中で「子育てという営みに対して主体的に参加した個人が自立性と多様性を持ちながら、自由で開かれた関係を構築し、ゆるやかな連帯を生み出す場を形成しようとしている」という特徴を打ち出し、今後の展望を描いている（大豆生田 2002）。しかしこの知見は、子育て広場の利用者を対象とした意識調査から導き出されたものであり、支援者の意識を扱ったものではない⁽³⁾。

支援者の意識と組織特性との関連については、筆者自身がファミリー・サポート・センターにおける支援者を対象とした調査を行っており、活動にいたる動機付けの類型化を試みたものがある（山下 2004）。ファミリー・サポート・センターは、地域を基盤に展開される活動であるが、基本的には行政主導で運営されており、領域的には公的セクターに分類される。この支援者の意識分析からは、動機付けとして4つの類型があることを示した。それらは、第1に保育士などの専門性を活用したいという「専門性の活用」、第2に近くに実家がない人たちに対し支援をしたいという「家族の代替性」、第3に今までの子育て経験を活かしたいという「子育て経験の活用」、そして、第4に社会の中に関わっていききたいという「社会参加」の4類型である（山下 2004）。さらに高齢者福祉の領域における住民参加型組織との比較において育児支援者に固有の動機付けが見出されたことから、高齢者福祉の担い手よりも、より広く支援者を確保できる可能性を指摘している。

本研究では、こうした先行研究の動向をふまえ、以下の手法により、住民主体型育児支援組織の有用性と課題を明確にすることとした。まず第1に、複数組織の代表者を対象にした調査、分析から、活動を始めるに至った動機付けや活動継続を規定している動機付けの抽出を試み、組織の有用性との関連を検証する。既にこうした組織が育児の社会化の一翼を担っている現状をふまえると、組織が共通に持つ特徴から評価を行う必要がある、という理由に基づいている。第2に今回調査対象とした組織代表者の意識と、理念的には行政関与型と位置づけられるファミリー・サポート・センターの支援者との比較分析を行う。公的な育児支援の担い手との比較により、住民主体型組織の特徴をより明確に導き出すこととしたい。

3. 研究方法

調査対象者は、宮崎県において育児支援活動を行っているNPO法人、任意団体のリーダー11名である。本研究の目的はリーダーの意識から組織の有用性を評価、検討することにあつたため、育児支援を行っている担い手の中でも、ある程度活動の安定性や定着性がみられる団体や組織の代表者を分析対象とすることとした。そのため調査対象者は、行政が把握している

団体の代表者とすることとし、宮崎県（子ども政策課、生活・協働・男女参画課）の協力を得て選定を行った。調査対象者が属する組織の規模や性格の異なりは否めず、NPO法人から任意団体までが含まれているが、それぞれ個別に細分化された議論をするよりも住民主体を共通項とし包括的に議論することの意味があるのではないかという観点にたっている。

調査方法は、インタビュー法とした。インタビューは、半構造化面接で行い、活動をはじめるといった経緯や動機付け、活動に対する理念などについて自由に語ってもらった。またあわせて代表者の属性についても調査項目に含めている。調査時期は、2008年8月より2010年10月までである。倫理的配慮として、研究目的、研究方法、匿名性及びプライバシーの確保などについて事前説明を行い、同意を得たうえで、調査を実施した。

分析対象としたデータは、インタビュー調査の内容の他、調査の中で得られた総会資料等の文書資料、代表者に対するインタビューが掲載された雑誌やホームページの内容も含めている。これらの内容から、活動をはじめるといった動機付けや活動の継続を規定している動機付けを、定性的手法により探索的に抽出する分析を行った。

4. 調査対象者の概要

調査対象者の属性については、表1を参照されたい。今回の調査対象者の性別は、全員が女性となっている。年齢は30歳代が4人、40歳代が4人、60歳代が3人である。活動開始前の職業属性については、有職者が4名、専業主婦が7名という構成である。このうちケースDは、常勤の仕事についていたが、この活動に専念するために退職した経緯がある。またケースKは、出産後、専業主婦をしていたが、現在は看護師として復帰し、同時に子育て支援活動も続けている。有職者の具体的職業については、ケースFは助産師、ケースGは自営業、ケースIは保育士である。

5. 結果と考察

(1) リーダーに見出される6つの動機付け

今回の調査対象者において、活動をはじめるといった動機付けや活動を規定づけている動機付けとして抽出されたものは、6つに分類された。そのうち4つは、ファミリー・サポート・センター調査時と類似のものであり、「専門性の活用」、「家族の代替性」、「子育て経験の活用」、「社会参加」である。また今回は、「家族の代替性」に近いものとして、「地域の代替性」という意識も見出された。さらに今回の調査では新たに、「学習への志向性」、「ネットワーキングへの志向性」という2つの類型が見られた。以下、それぞれの動機付けについて説明を行うが、調査対象者がどの動機付けを有しているかについては、表1を参照されたい。また、動機付けの分類の根拠とした発言内容については、表2を参照されたい。

表1

case*	年齢**	活動開始前の職業	所属している組織について				動機づけ
			組織	組織形態	活動開始	主な活動内容	
A	63	無し	A	NPO法人	2000年	<ul style="list-style-type: none"> ○中心市街地の場を活用した子どもの一時預かり、親子の場づくり、子どもの居場所づくりの事業 ○放課後の子どもの活動支援 ○イベントの開催 ○文化・芸術事業(スクールコンサート・ふるさと先生・異世代交流) ○保護者向け講座 ○子育て情報の発信(ポータルサイトの運営) 	子育て経験の活用 社会参加 ネットワーキングへの志向性
B	61	無し	B	NPO法人	2004年	<ul style="list-style-type: none"> ○親子で訪れる広場の運営(3子育て支援センター+1児童館) ○研修事業(保護者向け研修+子育て支援者向け研修。年に100回以上開催) ○広報事業(広報誌の発行) ○文化・体験事業 ○大学生による保育サポーター養成 	家族・地域の代替性 子育て経験の活用 社会参加 学習への志向性
C	61	無し	C	任意団体 ↓ NPO法人	2001年 2004年(NPO法人化)	<ul style="list-style-type: none"> ○「第2の実家」としての託児や子どもと母親の居場所づくり事業 ○料理教室や農業体験などの食育事業 ○講座・講演・学習会事業 ○出張保育事業 	専門性の活用 家族・地域の代替性 社会参加 学習への志向性
D	34	団体職員	D	任意団体 ↓ NPO法人	2003年 2006年(名称変更) 2010年(NPO法人化)	<ul style="list-style-type: none"> ○育児情報誌(フリーペーパー)の発行(季刊) ○交流会やイベントの企画・実施 	子育て経験の活用 ネットワーキングへの志向性
E	38	無し	E	任意団体	2005年	<ul style="list-style-type: none"> ○勉強会・講演会の企画・実施 ○出産・育児に関する本の出版 ○子育てに関する交流活動(週1回) 	子育て経験の活用 学習への志向性 ネットワーキングへの志向性
F	45	助産師	F	任意団体	2006年	<ul style="list-style-type: none"> ○交流会やイベントの企画・実施 ○母乳育児の推進 ○育児手帳の制作 ○里帰り出産しない家庭のための家事応援隊の派遣(準備段階) 	専門性の活用 子育て経験の活用
G	39	自営業	G	任意団体	2005年	<ul style="list-style-type: none"> ○代表者の自宅の庭を地域の子どもたちに開放した活動(週1回・登録制) ○代表者の自宅の庭を保護者の憩いの場として提供した活動(月2回) 	ネットワーキングへの志向性
H	41	無し	H	任意団体	2006年	<ul style="list-style-type: none"> ○会報の発行、メールによる情報提供 ○保護者向け学習会の実施(年8回) ○子どもを中心とした年5回の交流会の実施 ○学習支援活動(週1回) 	子育て経験の活用 学習への志向性 ネットワーキングへの志向性
I	43	保育士	I	NPO法人	2007年	<ul style="list-style-type: none"> ○日中一時支援事業 ○一時預かり保育 ○病後児保育 ○送迎事業 	専門性の活用
J	46	無し	J	NPO法人	2003年	<ul style="list-style-type: none"> ○親子で訪れる子育て広場の運営 ○ファミリーサポートセンター事業の運営 ○相談事業 ○小中学生の居場所づくり ○こどもの社会参画の支援 ○子どもの参画によるまちづくり活動 	家族・地域の代替性 子育て経験の活用
K	34	無し	K	任意団体	2009年	<ul style="list-style-type: none"> ○育児情報誌(フリーペーパー)の発行(季刊) ○サークル活動(親子で楽しめるふれあい活動、子育てに関する勉強会・講演会、運動会・クリスマス会等のイベントの開催)(月1回) 	専門性の活用 子育て経験の活用 学習への志向性

*A~Kの順番は、初回インタビューを行った順としている。

**年齢は、調査終了時の2010年10月時点のもの。性別については、全員女性。

①専門性の活用

「専門性を活かしたい」という意識は、ケースC、F、I、Kに見出すことができる。この意識の基盤となっている専門的領域は、ケースC、Iにおいては保育士資格、幼稚園教諭免許という保育、幼児教育領域、ケースF、Kでは、看護師資格、助産師資格という医療関係領域である。さらにケースIは、以前から所有していた保育士資格に加え、活動をはじめるにあたって社会福祉士の資格を取得した経緯があり、社会福祉領域全般の専門性を有している。以下、ケースごとにその内容をみていく。保育士資格、幼稚園教諭免許を所有しており、結婚前は幼稚園で働いた経験があるケースCは、行政が開催する市民講座において勉強をしていくうちに、資格を活かした活動をしたいという気持ちに至っている。またケースFは、産婦人科医である夫の病院で、妊娠中から育児期までの連続した子育て支援活動を行うと同時に、同じく病院を活動拠点とする育児サークルを運営しているが、その契機として、自分自身の子育て経験のつらさや孤独感から、助産師としての母親支援の必要性を感じた点を語る。さらにケースIは、保育士の仕事を通して出会った障害児の母親達から、障害児の家族のおかれている支援不足状況を知り、それに対して、保育士である自分が貢献したい、という思いに至ったという点を語っている。そして看護師であるケースKも、子育てのために仕事から離れていた時期に、子育て中の問題を見聞きする中、看護師という職業的専門性を活かした活動をしたいという思いが湧いてきたことを語る。

これらの事例から、この「専門性の活用」という意識は、子育て中に自分自身が何らかの問題を経験したり、あるいは子育て中の母親や家族が抱える問題を見聞きする中で支援に対する志向性が生じており、そうした支援の1つの手段として、それまでに持ち合わせていた専門性の活用が想起されたものとして位置づけられる。いわば職業キャリアで持って貢献したいという利他的志向性がここにあらわれているといえよう。

②家族・地域の代替性

「家族の代替性」は、ケースC、Jにみられる動機付けである。ケースCは、出産・育児を経験した長女から、転勤族で実家が近くにない母親たちが少なくない状況を知り、子育て中の母親達を自分の子どもと同じように支援したいという思いに至ったことを話す。また支援活動を通して疑似的な親子関係が形成され、そうした関係性が継続していくことに関し、「第2の実家」というキーワードを用いて説明している。同様にケースJにおいても支援対象者の母親のような存在がめざされているが、そこには自分自身が実家から離れて育児を行った経験があり、同じような苦勞をしている母親達を助きたいという思いが語られる。そしてケースCと同じく「第2の実家」という言葉が用いられている。この家族の代替性という動機付けに関連して、今回見出されたのが、地域の代替性という動機付けであった。ケースBは、かつて行われた近隣関係における互助性が支援活動の1つの考え方となっていることを示す。

ファミリー・サポート・センター調査時の考察では、育児支援者を得られないことによる不安や悩み、他方で援助を得たことによって安堵する状況を別居子から聞いた経験から、育児支援者となっていくプロセスがあった。こうした経過は本研究の調査においてもみられ、周囲で支援者を得られない家族がいるという子どもからの情報が支援活動の契機となっていることがわかる。さらに自分自身が実家と離れて暮らしていた経験に基づき、家族に代わって支援をしたいという気持ちに至っているというプロセスも見出される。さらにケースBの「隣のおばちゃ

ん」でありたいという発言については、近年、希薄になったとされる、近隣関係、地縁関係を意識的に築きたいという志向性であり、「家族の代替性」という動機付けと類似したものと位置づけることができる。さらに興味深いことに、ケースCとJにおいて、まさしく家族の代替性を示す言葉である「第2の実家」という表現がみられ、この動機付けの内容が明確に意識化されていることが明らかとなった。

③子育て経験の活用

この動機付けは、ケースA、B、D、E、F、H、J、Kにみられた。ケースA、Jからは、かつての自分自身の子育て時代に助けられた経験に基づいて支援活動をしたい、という互酬的な観点に基づいた意識を読み取ることができる。対立的にケースB、Fにおいては、支援をなかなか得られなかった育児経験を振り返り、そうした経験が支援活動の原点となっていることが話される。さらにケースD、E、H、Kは、現在も子育て中の当事者であるが、孤立状況や情報不足を経験し、そうした問題の解決が、支援活動に結実していたことを語る。

ここには2つの異なる経過がみられる。第1は子育て中に感じた寂しさや孤独感、苦悩や困惑というように、子育て経験のうち、マイナス要因が基盤になって支援動機となっているものである。第2は自分が実際に助けてもらった、という子育て経験におけるプラス要因が支援動機として働いているものである。第2のプロセスにおいては、そうした経験に基づいて今度はお返しをする、あるいは、自分がやってもらったことを他の人にもしてあげたい、という構図が形成されている。ファミリー・サポート・センターの支援者と同じく、帰属的な関係性ではなく、これから築かれる新たな関係性、つまり達成的關係において相互扶助性がめざされているという解釈が妥当であろう。

④社会参加

「社会参加」は、ケースA、B、Cにおいてみられた動機付けである。ケースA、Bは、ともに「おやこ劇場」の活動を母体として、子育て支援団体をたちあげた組織のリーダーである。本研究では、現在の団体の母体である「おやこ劇場」やその他の活動を回顧して述べた発言に着目した。ケースAにおいては、「おやこ劇場」が組織としての意思決定において民主的な方法をとってきたこと、またトラブルへの対処方法、行政との折衝の方法などにおいて、「社会に目を向け」、「社会の場を学ぶ」場であったと語る。またケースBも、「おやこ劇場」の活動や以前から行ってきた幼稚園や学校における読み聞かせボランティアの活動を振り返り、子どもと共に社会と関わる場であったことを述べている。一方、ケースCにおいては、子育て支援活動が専門的資格をもった女性が社会参加できる場となることへの期待を述べる。

この「社会参加」という動機付けは、社会との関わりや接点を持ちたいという意識であり、ファミリー・サポート・センターの支援者の場合、子育てが一段落した段階で、こうした意識が生じ、支援者となるプロセスがみられた。しかし今回の調査では、単に社会の活動に参加したい、社会との接点を持ちたいといったものに止まっていないことを読み取ることができる。第1に、ケースCは、ジェンダーの視点をもった社会参加ととらえられ、特に社会との接点をもちにくい専業主婦を念頭に置いた発言が特徴的である。さらにケースA、Bは、今までの活動を振り返って、解釈や意味化を行い、社会参加していくことの重要性を認識し、さらにこうした社会参加の新しいステージとして、現在の育児支援活動を位置づけていると解釈できる。

⑤学習への志向性

「学習への志向性」という動機付けは、ケースB、C、E、H、Kにみられる。ケースBは、結婚や子育ての初期の段階において近代的母親規範を内面化し、それに対する「疑い」を感じずに過ごしていたが、育児の負担感や孤立感から、そうした規範を問題視するようになり、学習経験を通して社会全体の問題として認識するようになったという。さらにそうした学習経験が支援活動と結びついた、と話す。同様にケースCも、ケースBと同じく近代的母親規範に対する疑問をもつ中、行政の主催する講座でジェンダーの問題を学習する機会を得、そこから支援活動につながったという。さらにケースEは、死産、流産という個人的体験の意味を問い続ける中で、お産についての勉強会に出会い、支援活動はそうした意味を問い続けるために行っている、と話す。そしてケースH、Kは、育児に関する情報が不足し学ぶ機会がない中、学習の場の必要性についての発言を行っている。

これらの意識を解釈すると、ケースB、Cにおいては、自らの子育てを通じて感じた疑問や体験などを、学習経験の中で社会問題として認識化し、そうした認識に基づいて支援の必要性を感じているというふうにとらえられる。ともに近代的母親規範に対する疑問が形成されており、Bは専業主婦の問題、Cは専業主婦に加えて、女性が仕事を得られない問題に対する自らの疑問を社会問題として意識化し、こうした意識が支援者となる1つの水路となっている。一方、妊娠・育児において生じたつらい体験・経験の意味を問う作業をしているのが、ケースEである。そして支援活動における学習経験を通じて、その体験を昇華させようとする志向性というふうにとらえられる。さらに育児に関する学習機会の必要性を感じているのがケースH、Kである。

⑥ネットワーキングへの志向性

最後に「ネットワーキングへの志向性」という動機付けである。この動機付けは、ケースA、D、E、G、Hでみられる。ケースDは、育児中の当事者として、当事者間のつながりを求めていたことが、育児支援の組織化の1つの契機であったことを語る。またケースE、Hにおいては、育児に関する情報不足に対する問題解決としてネットワーク化が志向され、組織化へとつながっていたことが話される。さらにケースAは、自分自身が子育てをしていた時期と現在とを比較し、子育て中の母親同士の交流が地域でなかなかもちにくい問題を感じている。一方、ケースGは、従来からネットワーキングへの志向性が強い方向性の活動を展開しており、実際の活動にも様々な支援者の参加がみられる。

これらの事例の発言内容を検討してみると、この動機付けが形成されるにあたっては、ケースGを除いて、子育てにおける孤立環境との関連性が高いといえる。つまり社会関係の構築が自然発生的には困難であり、子育てにおいても孤立化しやすい環境が、つながりを求める意識を形成していると解釈することができる。これは、ケースAがかつての状況と現在とを比較して述べた言葉にも象徴的にあらわされている。

表 2

動機付け	ケース	発言内容
専門性の活用	C	男女共同参画基本法ができた頃、市が開催する講座でジェンダーについての勉強をしてく中で、今までの生き方が間違っていないということに気付かされた。自分の資格を生かした何かがしたいと組織Cをつくることを考えた。 ⁴⁾
	F	助産師として、お母さんを守らないといけないう気持ちがあつて。教われるんじゃないかなあと思ったので。 ⁵⁾
	I	私が保育園に勤めている時に、障害を持っている子のお母さん方がどこもいところがないって。保育園まではみてもらえるけれども、実際に学校に行き出したら、学童での受け入れの場はないということですね。(中略)それで自分でできることであればと思って。 ⁶⁾
	K	子育てで専業だったんですが、それで、何かできること、社会に貢献できることないかなあと思った時に、私は別に小児科で働いていたわけではないけれども、看護師として活かせることがあるんじゃないかと思って。 ⁷⁾
家族・地域の代替性	B	必要なときは助け求めていいよって。私たちが目ざすところは、世話焼きおばちゃん、隣のおばちゃん。 ⁸⁾
	C	長女が子どもを産んだときに、長女のまわりのお母さん達が、髪も洗えなくて大変という話を聞いた(中略)(活動を通して私が)みんなの親をやっている。転動して行って、(引越していっても、自分のところに)実家みたいに帰ってくる。 ⁹⁾ 『『自分の子どもにしたように、子育てに困っている他のお母さんにもしてあげたい』と同じ思いを持つ友人4人で民家を借り、"第2の実家"『C』を開設しました』(宮崎県男女共同参画センター 2006: 第3段落)
	J	自分が実家がかつちになかったの。まあ年代的に私たちは連れてくる子たちのお母さんに近い年齢でもあるので、その子たちの第2の実家になればいいなあって思ってます。 ¹⁰⁾
子育て経験の活用	A	「私も子育て中にいろいろ支えてもらった経験もあり、子どもが手を放れた私たちが、今度は協力できたらいいなと思いはじめました。」(街が元気だネット! 2007: 第3段落)
	B	私自身が(助けが)本当に欲しかったのが5歳くらいまでですよ。そのときは、今のようサービスが何にもなくて、本当に大変でした。そのときに、もっとつながってたらなああって。多分活動をしている原動力はそこかなと思います。何にもなくて、友達もいないし、夫は忙しいし、帰ってこないし。 ¹¹⁾
	D	「育児休暇中は育児情報がなくて困ったり、周囲に話せる友人もなくて寂しい思いを経験した(中略)そこで得意なパソコンを使ってHPを開設すると、同じような思いのママ達が集まり、活動の輪が広がりました」(男女共同参画センター 2007: 第1段落)
	E	初めての育児で、まわりは全然知りあひもない。小児科もわからない。そういう情報がない中で何か情報がないかなあと思っていて、探していた時に出会ったのが組織E。やっぱり広がったことで、ありがたいと思って。それで、世界が広がったので、恩返しできることがあれば、できたらいいなあって思ってます。 ¹²⁾
	F	私の場合は、産婦人科なので、私みたいな人をどうにかしてあげたいって。いっぱいいますので。 ¹³⁾
	H	そこですよ。みなさん、悩んでるのは。キッズにしても学習支援にしても、居場所。学習支援は子ども達の居場所になってますよね。交流会は子ども達もだけど保護者の居場所でもあるので。 ¹⁴⁾
	J	自分もこうやって1人で転動族でH市に来て、先輩のお母さん達に助けられて、子どもを連れてそこに行くことで、1人でお家にこもらなくてすみますよね。友達の輪が広がったりとか。そういうのすごく助けられたので、そういう場を提供したい。 ¹⁵⁾
	K	働いている時は、専業主婦は、(中略)楽しそうな優雅なイメージがあつたんですけど、それを自分がやったときにとっても大変ということがわかって。育児には専念するし、家庭は守らなくちゃいけない。始終子どもと一緒にいなくちゃいけないストレスがすごくて。 ¹⁶⁾

社会参加	A	社会に目を向けられた1つの出来事、母親が社会の場を学ぶ1つの場であった。 ¹⁷⁾
	B	子どもの成長と一緒にできる、子どもこみでできる社会参加というのを、今振り返ると多分そうなんですけどね。やってたんだなって思います。 ¹⁸⁾
	C	「保育士の発掘によってその人たちも社会参画できるきっかけになると思う。女性の自立を応援したい」(宮崎県男女共同参画センター 2006: 第2段落)
学習への志向性	B	私たちの頃は専業主婦がほとんどだったんで、結婚したら仕事やめて子育て、家事、育児。それがいい奥さんとかいい母とか。で、私はそれにはじめ、何の疑いもなかったわけですよ。でも子育てしての中で、あれっ、あれっって思いだしました。でさっきいったように、私だけの問題じゃなくて、社会構造なんだって思ったら、結局1人の問題は社会の問題と思うようになったんですよ。 よく言われるパーソナル イズ ポリティカルというのは、子育てを通じて、私の中での発見です。本にはいっぱい書いてあるんだけど、自分がそうならないとわからない。私自身が悩んでいる問題って社会の問題なんだからこれ0歳から5歳とか6歳まで支援をしようと思ったのが、そもそもの、多分。今振り返るとですよ。 ¹⁹⁾
	C	入退院をくりかえす5年、外国に行く日々、命が長くないと思っていた時に、市の広報でまちづくり提言講座があることを知った。そこでジェンダーの問題に出会った。そのときは主婦、女性の生きにくさを感じていた。 ²⁰⁾
	E	お母さんたちが知りたいことを勉強しようという会だったので、面白そうと思って、勉強しようと思って、関わるようになったというのがきっかけ。(中略) 初めて妊娠したのが、双子ちゃんて7カ月で亡くしたんですね。死産だったけど、その体験が強烈というか…そうですね。次の妊娠も流産だったんですよ。(中略) 活動とかも自分のためって感じ。なぜあの子たちは、この世に生を受けなかったんだろう?とか。そういう自分への問いかけ。答えがみつかるって楽になるというか…。見つからない方が悶々と。答え探しの途中というか、そういうところにいる。あの子たちの事が原点ですかね。 ²¹⁾
	H	「自分で障害の知識を学びたい。(中略)ただ単純に勉強したい。それだけでした。」(『ACTIVO!』 2009)
	K	熱がでたから心配で来たのに、コンビニ受診と思われてしまう。それを言われたお母さん達はショックを受けてしまう。そういうケースを耳にすることがすごく多かったので、そういう知識を増やす講演会とか勉強会とか、そういうきっかけを私が作ったらいいんじゃないかって思ったんですね。 ²²⁾
	A	地域の子育てが難しくなっていった。生協もみんなであけてその場でワイワイやっていたり、何かをするときは誰かの家に集まるのではなくて、公民館などを施設を使うようになってからは、活動が時間で区切られたり、つながりが濃くなかった、薄くなったとか。 ²³⁾
ネットワーキングへの志向性	D	出産前にお仕事をやめる人が、出産してからのお友達がほしい。 ²⁴⁾
	E	妊婦時代から地域の方を知っていたりすると、何かあった時に、その場所があるというだけで安心とか。私の場があるという、そういう場所で広場(組織Eの交流活動の場)はありたいと思う。(中略) 知らない情報は、宝の情報。情報を話すことで、誰かとつながって誰かの役に立っているんだということで、負ではない正のスパイラルを作っていきたい。それが今、幸せだなって思う。 ²⁵⁾
	G	「とにかく動いて、人と交流してつながっていくことが大切」(宮崎県男女共同参画センター 2007: 第6段落) 「あらゆる人とのふれあい続けられることに幸せを感じている。すべての人が自由に集えて、コミュニケーションがあふれる空間になり続けられたら幸せです。」(街が元気だネット! 2009: 第4段落)
	H	学習会を行って、それからお母さん達と集まって、話をする中で、情報交換とか、自分達で何の情報もないし、つながりもないし。集まって学習会をして話をするって大事だよなってなって。 ²⁶⁾

(2) 考察

以上の結果をふまえ、総括を行う。本研究では、住民主体型育児支援組織のリーダー11事例の語りと文書資料等の内容から、子育て支援活動をはじめるといった動機づけや活動継続を促している動機付けとして、6つを抽出した。そのうち、「子育て経験の活用」、「専門性の活用」、「家族・地域の代替性」、「社会参加」は、筆者が以前に公的領域における育児支援者の分析を行った際の動機づけと類似したものとした。またそれ以外に「学習への志向性」、「ネットワーキングへの志向性」の2つの動機付け類型を示した。

さらに、それぞれの動機付けにおいて考察した内容を再度確認しておく。まずファミリー・サポート・センターの支援者と同じタイプとした動機付けにおいても、より細かく検討すると、内実においては異なる傾向がみられた。第1に「専門性の活用」という動機付けにおいては、職業キャリアで持って貢献するという利他的志向性の強さがみられた。つまり、単純に専門性を活かしたいという段階に止まらず、専門性を活用して「他の人の役にたたい」という志向性を読み取ることができた。第2に「家族の代替性」については、「第2の実家」という表現が使われているなど、まさしく家族を代替しようとする意向が明確に意識化されていることがわかった。また関連して、地縁的関係性を代替しようとする意向も明確に意識化されていた。第3に子育て経験の活用においては、子育てにおいて孤立した経験と、孤立環境の中で支援を得た経験がみられたが、このうち支援を得た経験によって達成的關係における相互扶助性が形成されていくプロセスを見出すことができた。第4に「社会参加」においては、ジェンダーの視点がみられ、また活動の意味化や解釈を通して「社会参加」していくことの重要性が明確に認識されているものであった。

次に新たに見出された2つの動機付けであるが、「学習への志向性」においては、学習機会の必要性を感じている意識が背景に見られた他に、興味深い2つの点がみられた。まず子育てを通じて感じた疑問を、学習経験を通して社会問題として認識化し、そうした認識に基づいて育児支援の必要性に気付いていくというプロセスがみられた。次につらい体験・経験の意味を問う作業を支援活動における学習経験を通じて行い、その体験を昇華させようとする志向性もみられた。そして孤独な子育て環境から、「ネットワーキングへの志向性」が生じていることが明らかになった。

これらをまとめると、住民主体型組織のリーダーの動機付けの特徴としては、利他的志向性が見られる点、動機付けの意味が明確に意識化されている点、自らの経験や学習経験を通じた問題に対する認知から支援志向が形成されている点などにおいて特徴がある。すなわちこれらの動機付けにおいては、他者への支援志向の強さ、動機付けとしての明確な認知、経験や学習活動によって裏打ちされた動機付けとしての強固さがみられる。拙稿（山下 2011）で示したように、組織基盤の脆弱性があるにも関わらず、これらの組織において活動の継続が可能となっており、さらに活動の多様性や質の高さが保持されていることについては、こうしたリーダーたちの動機付けとしての強固さや明確な認知が大きな規定要因となっているという解釈が可能である。

こうして公的領域における支援者との間に今回見出された相違点は、既成の子育て支援組織に参加していく支援者と子育て支援活動を行うために自ら組織化を行ったリーダーとの違いに基づいているということも考えられる。しかし住民主体型組織のリーダーに固有にみられる動機付けが、活動の継続や細かいニーズへの対応も成立させ、公的な育児支援が担えない部分の

支援も期待できる点については大いに評価すべきであろう。ただし、こうした意識や理念がいかに強く、明確に意識されたものであっても 組織基盤の脆弱性が解決できないままに、ずっと時間が過ぎてしまえば、逆にこうした理念や意識の強さや質の高さで支えられている組織であればあるほど、バーンアウトしてしまう可能性も否定できない。そういう意味でも運営上の問題を解決していくことは、組織の有用性を発揮する上で必要不可欠な事項である。本研究の限界は、この課題について検討していない点にあるが、引き続きの検討課題として設定し、本研究のまとめとしたい。

＜謝辞＞ 本研究の実施にあたり、快く調査にご協力いただいた皆様に心から感謝を申し上げます。また本報告は、文部科学省科学研究費研究「育児支援システムにおける住民主体型担い手についての実証的研究」（若手研究(B) 課題番号：21730483）による研究成果の一部を報告するものです。

注

- 1) 山縣は、子ども家庭福祉サービスの供給主体について、公的介入性と営利性という2つの軸で分類を行い、行政主導型供給システム、企業型供給システム、住民主体型供給システムの3つに分類している（山縣 1998：270-4）。
- 2) これに対し、ボランティア論においては、動機付け研究の蓄積が多くみられる。例えばFitch（1987）や鈴木広（1987）の研究があげられる。
- 3) 後に大豆生田は、伊志嶺美津子とともに子育て支援者の意識分析を行っているが、ここでは、子育て支援活動の内容や実施上の課題に焦点がおかれ、組織特性や組織の有用性につながる分析とはなっていない（大豆生田・伊志嶺 2005）。
- 4) 2008年8月8日 インタビュー調査時における発言。
- 5) 2010年9月14日 インタビュー調査時における発言。
- 6) 2010年9月26日 インタビュー調査時における発言。
- 7) 2010年8月16日 インタビュー調査時における発言。
- 8) 2010年9月8日 インタビュー調査時における発言。
- 9) 2008年8月8日 インタビュー調査時における発言。
- 10) 2010年9月7日 インタビュー調査時における発言。
- 11) 2010年9月8日 インタビュー調査時における発言。
- 12) 2010年8月5日 インタビュー調査時における発言。
- 13) 2010年9月14日 インタビュー調査時における発言。
- 14) 2010年2月24日 インタビュー調査時における発言。
- 15) 2010年9月7日 インタビュー調査時における発言。
- 16) 2010年8月16日 インタビュー調査時における発言。
- 17) 2010年10月2日 インタビュー調査時における発言。
- 18) 2010年9月8日 インタビュー調査時における発言。
- 19) 2010年9月8日 インタビュー調査時における発言。
- 20) 2008年8月8日 インタビュー調査時における発言。
- 21) 2010年8月5日 インタビュー調査時における発言。
- 22) 2010年8月16日 インタビュー調査時における発言。

- 23) 2010年10月2日 インタビュー調査時における発言。
 24) 2009年12月25日 インタビュー調査時における発言。
 25) 2010年8月5日 インタビュー調査時における発言。
 26) 2010年2月24日 インタビュー調査時における発言。

引用文献・資料

- Fitch, R. Thomas, 1987, "Characteristics and Motivations of College Students Volunteering for Community Service" *Journal of College Student Personnel*, 28(5), 424-31.
- 冬木春子, 2010, 「家族関係学の成果と課題—親子関係研究を中心に—」『第30回家族関係学会セミナー シンポジウム資料・自由報告要旨集』6-13.
- 大日向雅美, 2005, 「第5章 子育ての共有」大日向雅美・荘厳舜哉編『子育ての環境学 (実践・子育て学講座)』大修館書店, 113-131.
- 大豆生田啓友, 2002, 「市民活動としての子育てひろばの取り組み:NPO法人『びーのびーの』の活動を通して」『生活文化研究』9:105-119.
- 大豆生田啓友・伊志嶺美津子, 2005, 「地域の子育て家庭への支援に関する一考察:子育て支援者へのアンケート調査から」『関東学院大学人間環境学会紀要』3:33-48.
- 鈴木広, 1987, 「ヴォランティア的行為における“K”パターンについて:福祉社会学的例解の素描」『哲学年報』46:13-32.
- 山縣文治, 1998, 「多様な子ども家庭福祉サービス」高橋重宏編『子ども家庭福祉論』放送大学教育振興会:265-274.
- 山下亜紀子, 2004, 「育児支援者の動機付けに見る地域型育児支援の展望」『国立女性教育会館研究紀要』8:39-50.
- 山下亜紀子, 2011, 「住民主体型育児支援組織の特徴と展開」『社会分析』38:137-154.

その他

- 『ACTIVO!』2009年3月編集号, サンクロー.
- 街が元気だネット!, 2010, 「みやざき子ども文化センター」, 街が元気だネット! 特集NPOレポート, 2007年, (2010年9月24日取得, <http://www.machi-gennki.net/npo-report/kodomo/index.html>)
- 街が元気だネット!, 2010, 「花ふぶき一座」, 街が元気だネット! 特集NPOレポート, 2009年, (2010年9月24日取得, <http://www.machi-gennki.net/npo-report/hanafubuki/index.html>)
- 宮崎県男女共同参画センター, 2010, 「母親と子どもが安心して過ごすことのできる“第2の実家”を目指して」, チャレンジする女性達, 2006年 (2010年9月24日取得, <http://www.mdanjo.or.jp/challenge/theme04/ent/000028.html>)
- 宮崎県男女共同参画センター, 2010, 「『笑う門には福来る』がキーワード! すべての人たちに笑顔を提供するプロになる」, チャレンジする女性達, 2007年 (2010年9月24日取得, <http://www.mdanjo.or.jp/challenge/theme06/ent/000037.html>)
- 宮崎県男女共同参画センター, 2010, 「理想は、公益性もあるけどお金も稼ぐ“社会起業家”」, チャレンジする女性達, 2007年 (2010年9月24日取得, <http://www.mdanjo.or.jp/challenge/theme10/ent/000053.html>)